

肩腱板断裂患者の看護

Nursing to patient of cuff tear

～術前オリエンテーションに装具装着を試みて～

Pre-operative explanation with use of brace

東3階病棟：丸山智沙登 北島加奈子 天正亜希子

鯨川洋子 二木朗江

《要旨》

従来は、肩腱板断裂患者にパンフレットを用いて、術前オリエンテーションを行なっていたが、今回、装具装着体験を取り入れ、術後の日常生活動作4項目（①ベッドからの起き上がり動作、②ズボンの上げ下げの動作、③装具装着中の歩行、④装具装着中の階段昇降）の習得に、効果があるかを調査した。装具装着を体験した体験群と未体験群について調査した結果、体験群の起き上がり動作とズボンの上げ下ろし動作の習得度が早く、有意に差が見られた。装具装着を体験する事で、動作の早期習得に有効であったと考える。

《キーワード》

肩腱板断裂、外転枕、術前オリエンテーション、日常生活動作

1. はじめに

当病棟では、肩腱板断裂患者は、手術翌日より台形型の外転枕（図1）を装着され、肩関節可動域確保のためのリハビリテーションが、午前と午後のリハビリテーション部で行なわれている。昨年私達は、肩腱板断裂患者の苦痛についての調査研究を行った。その結果から装具装着による不自由さを訴える患者が多かったため、術前訓練の必要性を感じた。そこで今回、従来のパンフレットを用いての術前オリエンテーションに加え、術前に装具装着の体験を取り入れることで、術後の日常生活動作の習得に効果があるかを調査し、今後の看護に役立てたいと考えこの研究に取り組んだ。

図1



2. 研究方法

1) 研究期間：2004年 10月～12月

2) 研究対象

A群（未体験群）従来のパンフレットを用いた口頭説明による術前オリエンテーションを実施した群。男性5名 女性7名 平均年齢63.5歳。

B群（体験群）装具装着の体験を加えた術前オリエンテーションを実施した男性6名 女性1名平均年齢58.7歳。

倫理的配慮としてA群B群共、研究の主旨を説明し同意を得た患者を対象とした。

3) 方法

前回の研究で、患者が不自由と訴えた日常生活動作4項目を選択した。①ベッドからの起き上がり動作②ズボンの上げ下げ③ 装具装着中の歩行④装具装着中の階段昇降について、これら4項目についての動作が、どの程度できているかを記入する表を作成した。

4点～1点の自己評価点を術後毎日記入してもらった。評価基準は4点＝自信をもってできる、3点＝だいたいできる、2点＝あまりできない、1点＝できない、の4段階評定法を用いた。

留め置き法で回収率100%。

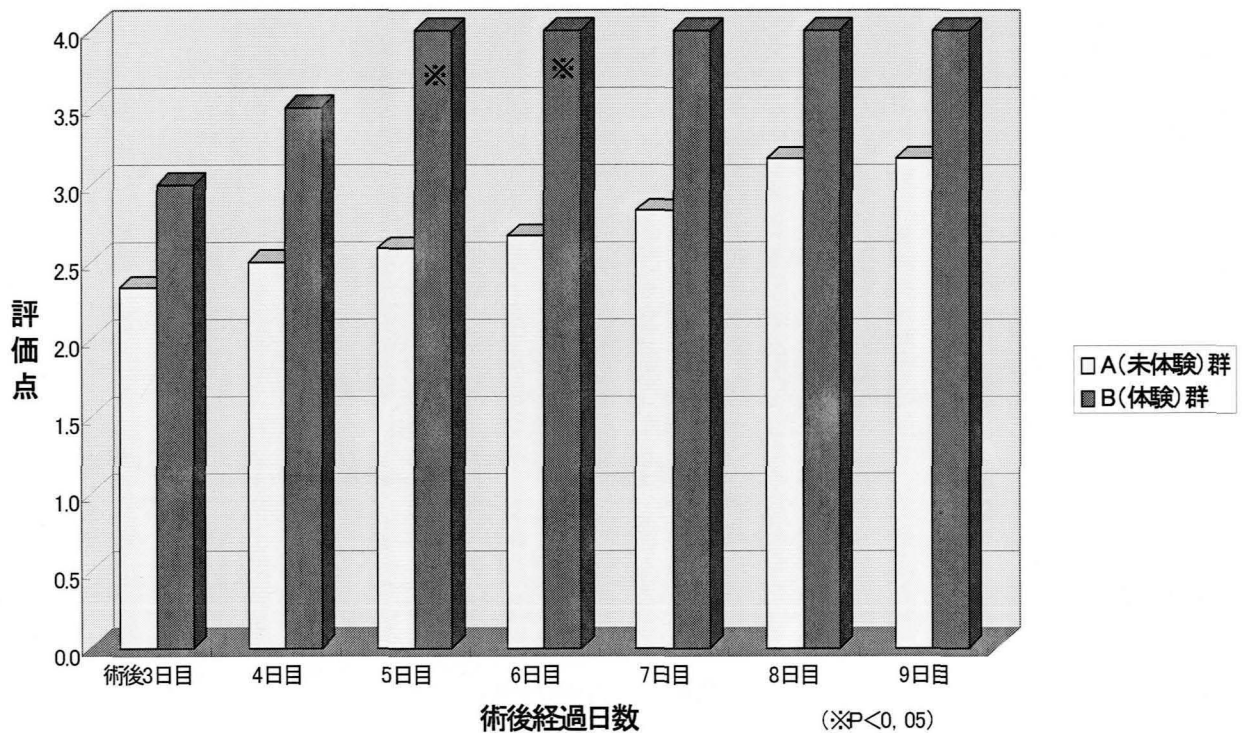
そして、術後経過日数毎の、評価点の平均値と自信を持ってできると評価した人の割合を、A群B群で比較し、マンホイットニー検定を行なった。

3. 結果

1) 体験群, 未体験群の評価点平均値の比較

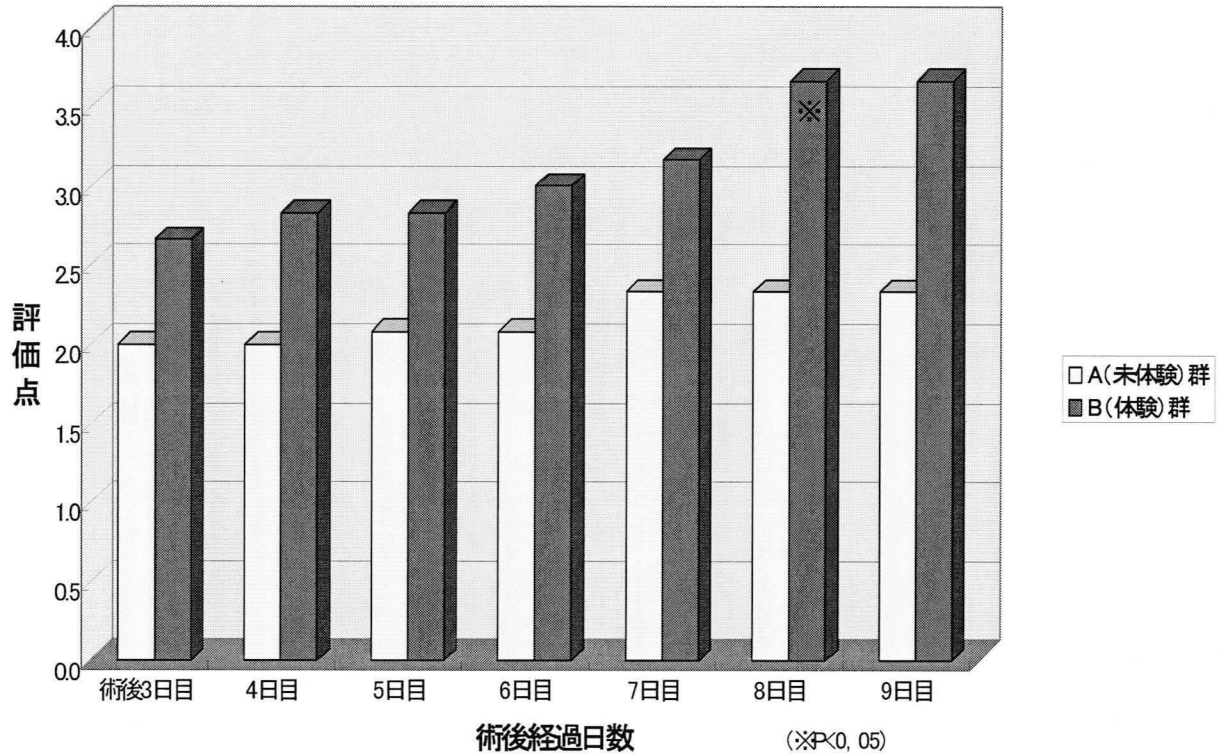
全項目を通し、体験群は未体験群よりも術後経過日数毎の評価点の平均値が高かった。①ベッドからの起き上がり動作については、体験群は5日目以降、自信を持ってできるという評価点4点に達しているのに対し、未体験群は8日目以降も4点に達しなかった。5日目と6日目に有意に差が認められた ($P < 0.05$) (図2)。

図2 起き上がり動作の平均点



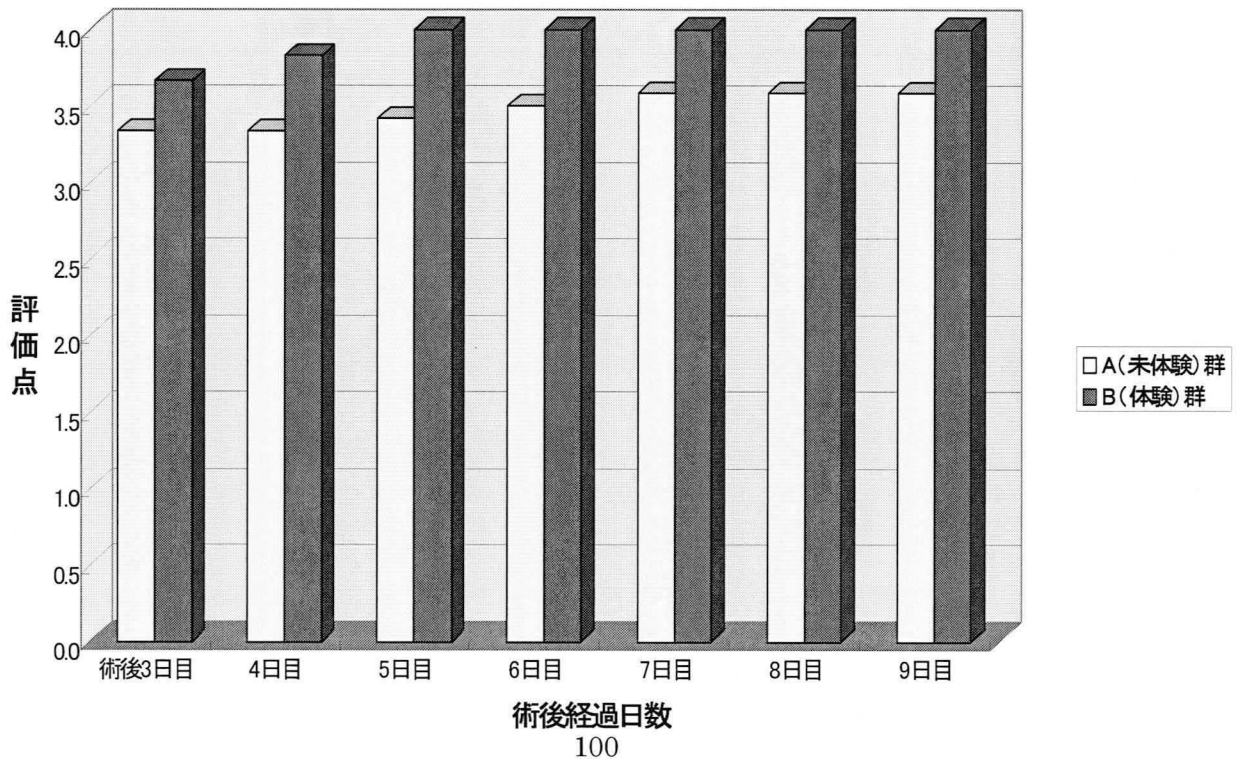
②ズボンの上げ下げの動作については、体験群は8日目以降3.5点と高値を示しているのに対し、未体験群は8日目を経過しても評価点が3点に満たなかった。B群の8日目に有意に差が認められた ($P < 0.05$) (図3)。

図3 ズボンの上げ下げの平均点



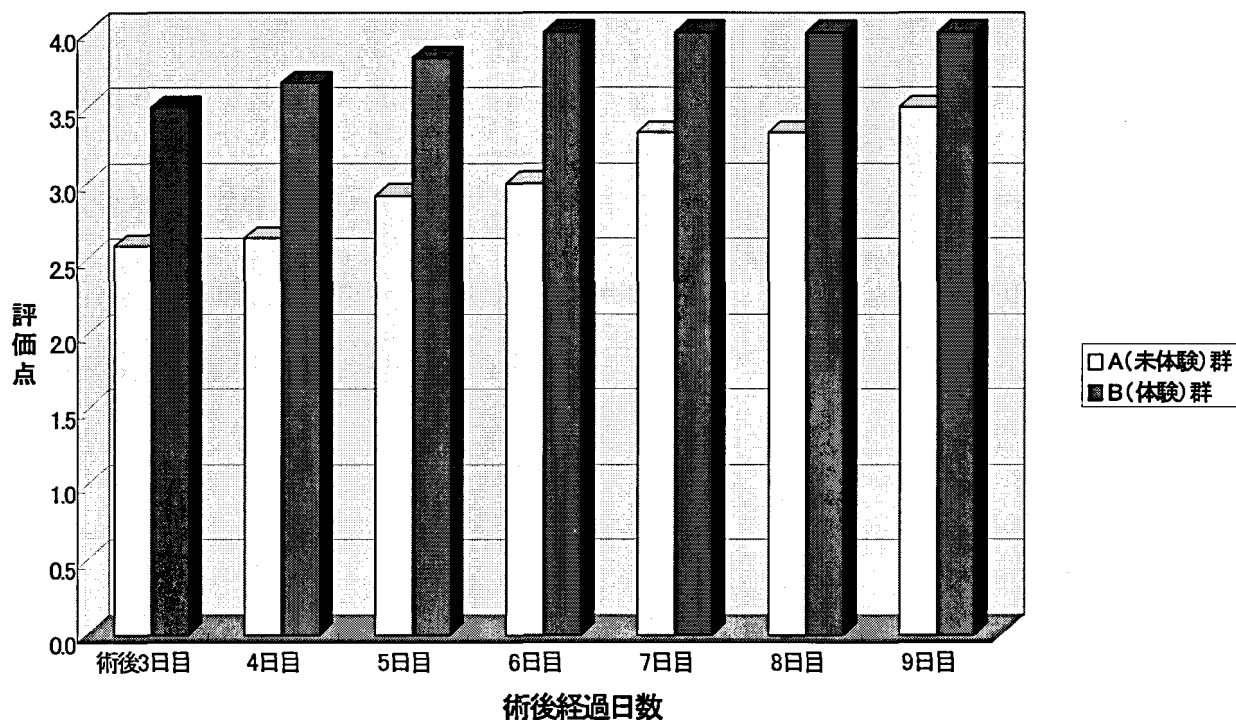
③装具装着中の歩行に関しては、体験群は術後5日目より評価点が4点に達していた。未体験群は4点には達しなかったものの3.5点と高値を示した (図4)。

図4 歩行の平均点



④装具装着中の階段昇降では、体験群の評価点は術後6日目より4点に達していたが、未体験群では9日目に至っても4点に達しなかった(図5)。

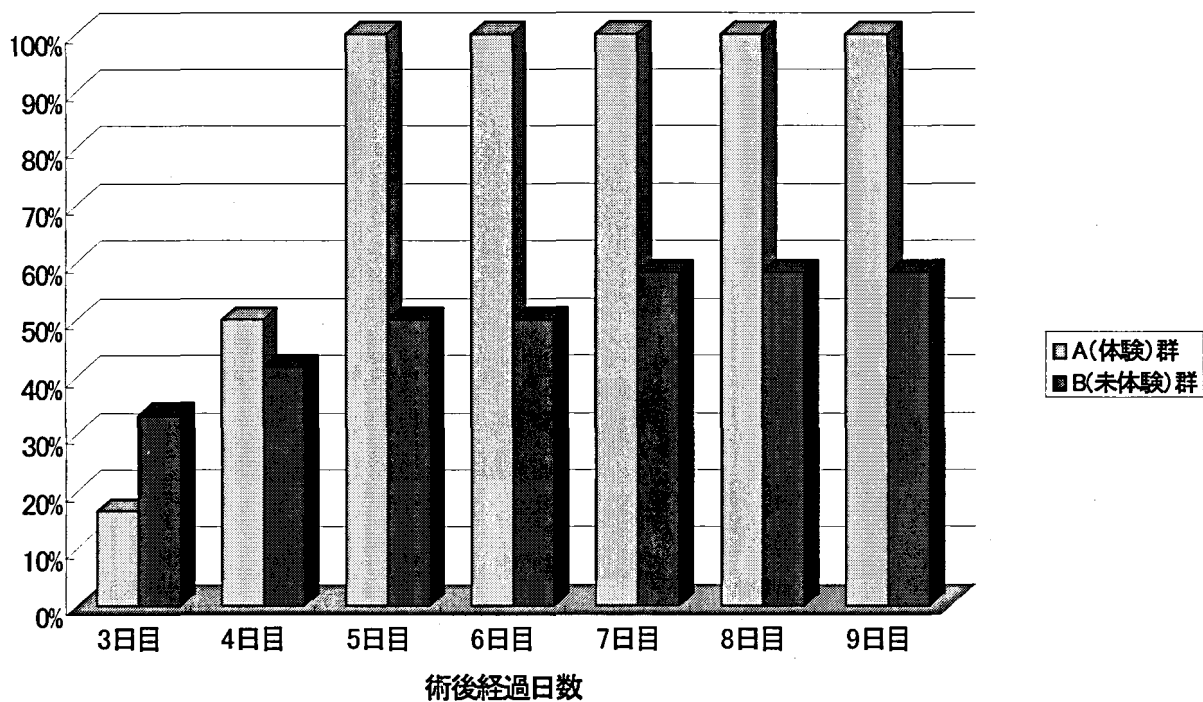
図5 階段昇降の平均点



2) 自信を持ってできる(4点)と評価した人の割合(%)の比較

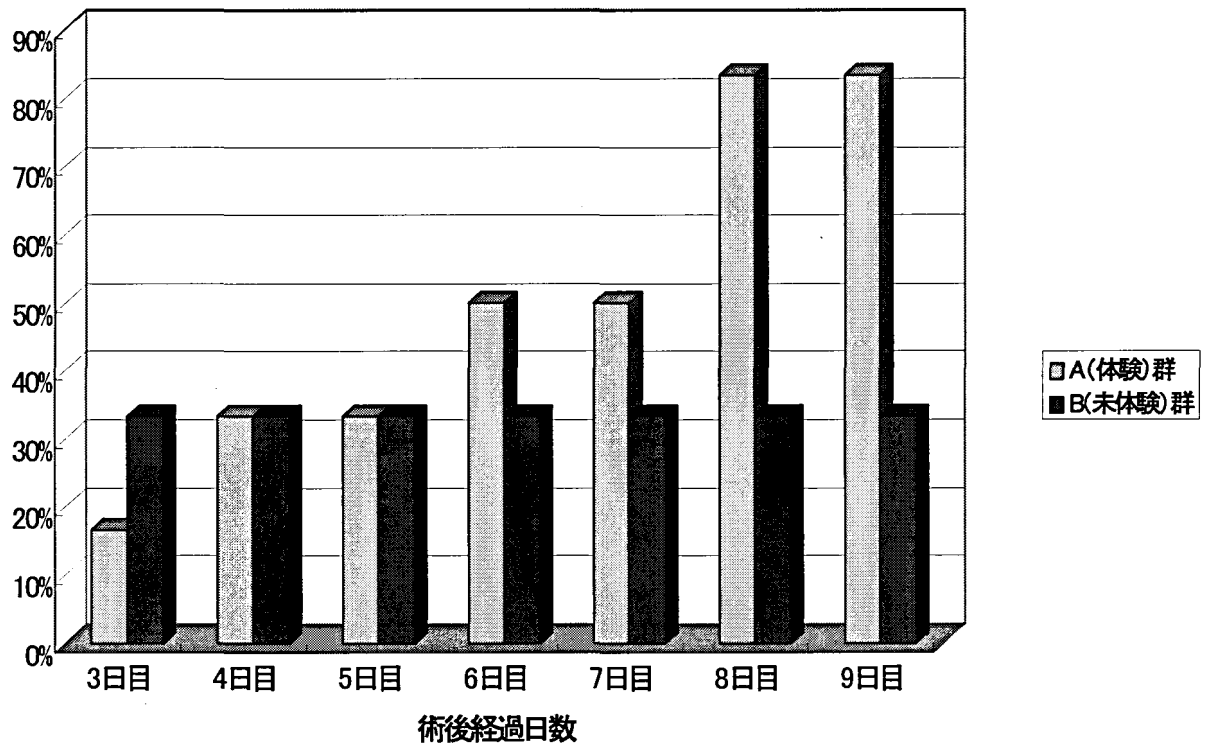
①ベッドからの起き上がり動作については、体験群は5日目以降100%に達しているのに対し、未体験群は9日目以降も60%に達しなかった(図6)。

図6 起き上がり動作が自信を持ってできると答えた人の割合



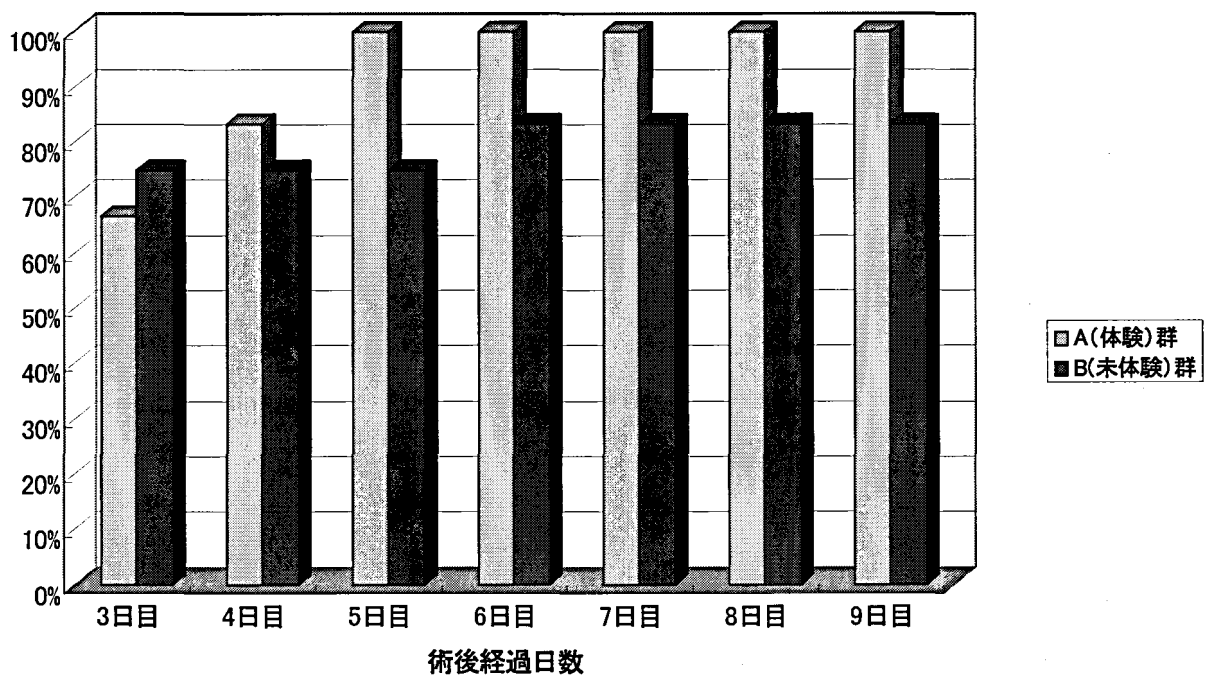
②ズボンの上げ下げの動作については、体験群は8日目以降に80%に達したが、未体験群は9日目を経過しても40%に達しなかった(図7)。

図7 ズボンの上げ下げが自信を持ってできると答えた人の割合



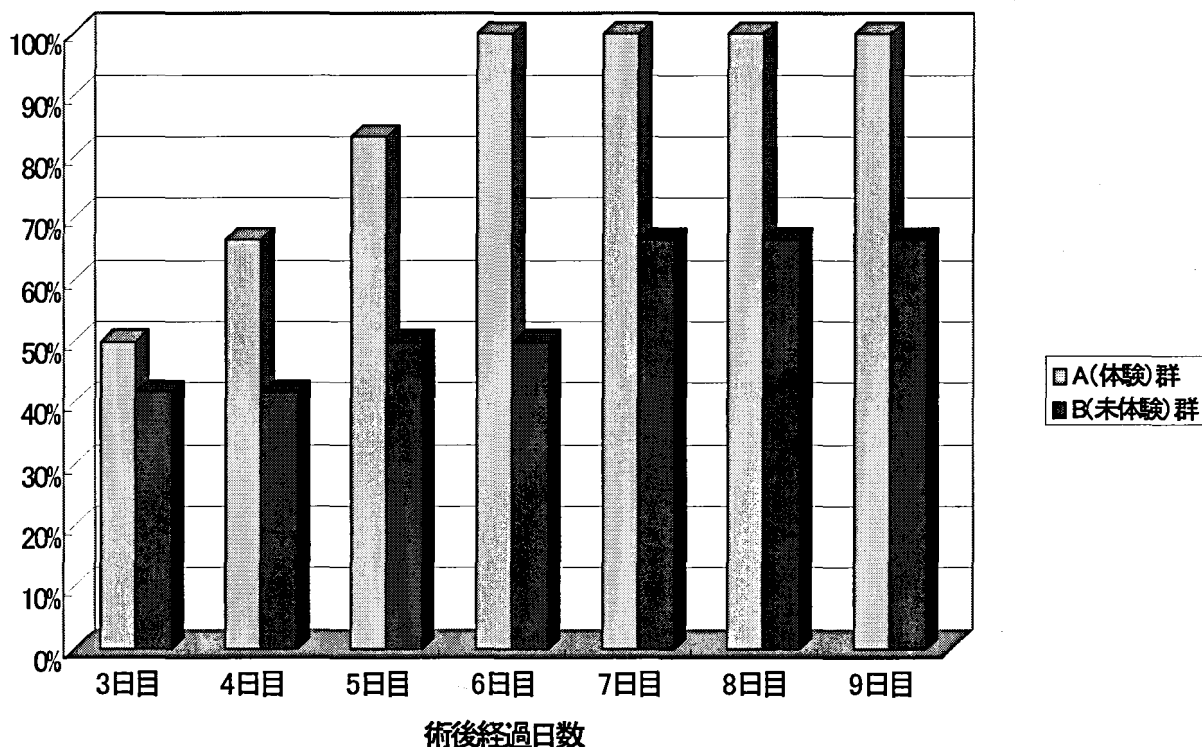
③装具装着中の歩行に関しては、体験群は5日目以降に100%に達しており、未体験群も6日目以降80%に達していた(図8)。

図8 歩行が自信を持ってできると答えた人の割合



④装具装着中の階段昇降では、体験群では6日目以降100%に達しているのに対し未体験群は9日目を経過しても60~70%であった(図9)。

図9 階段昇降が自信を持ってできると答えた人の割合



4. 考察

今回の調査で、①ベッドからの起き上がり動作、②ズボンの上げ下げの動作については、評価点の平均値の比較や、自信を持ってできると評価した人の割合から、体験群が未体験群に比べて術後の習得度が早かった。よって術前の装具装着体験が有効であったと思われる。その要因として考えられることは、患者が術前に装具装着を体験することで、装具装着での日常生活動作が理解でき、予測できたことで、装具を装着しての日常生活動作の不自由さについて、受け入れができたのではないと思われる。小迫は、「患者がおかれる環境や受ける処置について事前に情報を与えることで、患者は、術後のイメージを現実化できる事が効果的である」¹⁾と述べており、今回の結果も同様なことが言える。術前の装具装着の体験が、術後の日常生活動作のイメージ化を促し習得ができることで、術後早期より行動できたと考える。

また、当初、装具装着により足元が見えにくくなることへの不安があり、歩行に不自由さを生じるのではないかと予測をたて調査したが、装具を装着して歩行することに不自由さを感じている患者は少なかった。これは、肩腱板断裂患者は下肢に障害がないため、多少見えにくくても歩行等に対し不自由さを感じなかったのではないかと考える。今後も患者のニーズにあった具体的な支援方法

について検討を加えていきたい。

5. 結語

術前オリエンテーションに装具装着体験を取り入れたことは、術後の日常生活動作の早期習得に有効であった。

《引用文献》

小迫多喜子他：グループオリエンテーションにビデオを取り入れた術前訪問の効果，第 32 回成人看護 I，131 頁，2001 年

《参考文献》

高尾淑子他：肩腱板修復術後リハビリテーションと退院 1 年後の日常生活動作，整形外科看護 8 巻 8 号，65～71 頁，2003 年

岩永里美他：心臓手術を受ける患者のコンピューター導入による ICU 術前オリエンテーションの検討，第 32 回成人看護 I，139 頁～141 頁，2001 年